

【論文】

中学校・高校のスクールカーストにおける葛藤解決のプロセス

に関する検討

—大学生の回顧的な語りから—

千田 有那 (岩手大学大学院総合科学研究科)

奥野 雅子 (岩手大学人文社会学部)

I 問題と目的

主に中学校や高校のクラス内において、所属するグループや生徒の間にランク付けが成されているように感じたことはないだろうか。そのような現象を、「スクールカースト」と呼び、生徒はクラス内の順序付けに関して居心地の悪さを感じていることが知られている。スクールカーストの定義としては、「人気やモテるか否かを決定要因とした、クラス内のステイタスを表す言葉」(森口, 2007)、「学級内のグループ間に地位格差が生じる現象」(鈴木, 2012)、「仲間集団の間に、インドにおけるカースト制度のような地位の変動性が低い階層が生まれ、生徒の学級での生活や学級適応に影響を与える現象」(水野, 2016) など様々だが、本研究においては「クラス内においてグループ間及び生徒間に階層が生じる現象」と定義する。

スクールカースト上の地位の違いに伴い、生徒たちは異なる特徴を有することが指摘されている。例えば、鈴木(2012)は、上位の生徒の特徴としては「にぎやか」や「気が強い」、「若者文化へのコミットメントが高い」「異性からの評価が高い」などが挙げられるが、下位の生徒はおとなしく地味で、目立った特徴がないと述べる。また、貴島・中村・笹山(2017)は、学級内においてクラスメイトの多くと話題を共有できるようなメジャーな趣味を持つグループほど、多くのクラスメイトと交流を図ることができ、グループに所属する個人の周囲に与える影響力及びクラス内の地位が高くなると指摘する。

スクールカースト内の生徒たちの生活は地位によって異なり、上位に位置付けられている生徒は、クラス内で自分の意見を押し通す権利や、目立つ行動を取る権利などが与えられている一方で、下位の生徒は地位にそぐわない行動を上位グループから制限されているように感じており、自由な行動を取ることができない。また、上位の生徒も、上位生徒のみに許されるクラスの運営や方向性を決める「権利」を行使しなければならない状況を、しばしば重荷に感じることもある(鈴木, 2012)。さらに、作田(2016)は、スクールカーストを認識していると、女子は他者の視点に対する気疲れや不安感、損得勘定が高く、男子は「ウケることをする」傾向が高いと報告している。

これらのことから、スクールカーストは、様々な地位の生徒に葛藤を生じさせていると推察できる。さらにこれらの葛藤は、スクールカーストのある中学校・高校時点のみではなく、大学でも引き続き感じられることがあり、小原・平山(2018)は、劣等感の感じやすさにおいて中間層にいる生徒が、高校でスクールカーストの存在を認知すると、大学での劣等感を強

く持ちやすくなることと、高校時のクラスの位置づけが高いと認識すると、大学での自分に自信を持ちやすくなると明らかにしている。

一方、スクールカーストの中に生きる生徒たちにとっての「居場所」の重要性が指摘されている。藤林・渡辺（2019）は、大学生への回顧的なインタビューから、学級内のグループ間に階層が生じていても、集団内外に居場所があると学校での過ごしやすさに繋がると示した。さらに、小原・川崎（2019）は、中学から高校でのスクールカーストによって引き起こされる消極性から脱却するには、橋渡的な人間関係を広げることができる居場所や、承認的な性格を持っている居場所があることが効果的だと指摘する。

以上より、スクールカースト上位の生徒と下位の生徒それぞれの特徴が報告されており、それに伴う葛藤についても示されてきている。さらに、「居場所」などいくつかの要因が、スクールカーストによる負の影響を緩和する可能性についても示唆されてきている。しかし、スクールカーストという枠の中で生じる葛藤に、どのように対処、解決していくべきかという視点については未だ検討の余地がある。そこで本研究では、スクールカーストにおける葛藤解決のプロセスについて、大学生の回顧的な語りを通じて検討することを目的とする。

II 第一研究

1. 目的

中学校・高校におけるスクールカーストにおける葛藤及び葛藤が解決した体験の分類

2. 方法

(1)調査方法：Googlefoamを利用した質問紙調査

(2)調査時期：2020年9月～10月

(3)調査対象者：大学生119名（うち男性53名、女性65名、回答しない1名）平均年齢20.8歳（SD=2.42）

(4)調査手続き：フェイスシート（性別、年齢）、中学校、高校時代におけるスクールカーストの有無について5件法（「はっきりあった」、「たぶんあった」、「どちらともいえない」、「多分なかった」、「全くなかった」）と、スクールカースト内での居心地について5件法（「かなり居心地が良かった」、「やや居心地が良かった」、「どちらともいえない」、「やや居心地が良かった」、「かなり居心地が良かった」）、スクールカーストでの位置について5件法（「かなり上の方」、「どちらかと言えば上の方」、「中くらい」、「どちらかと言えば下の方」、「かなり下の方」）で尋ね、その居心地を感じていた理由、その居心地が変化することがあったかどうかについては自由記述で回答を求めた。

(5)分析方法：KJ法

3. 結果

スクールカースト内の居心地が「悪い」と感じていた理由、「良い」と感じていた理由、スクールカースト内の居心地が改善した体験についてそれぞれKJ法で分類した結果を、表1～3に記す。

表1 スクールカースト内の居心地が「悪い」と感じていた理由の分類

大カテゴリー	カテゴリー	内容	
上位グループの言動	見苦しい態度	いばる(2)うるさい(1)教師に歯向かう(1)幼稚な行動(1)ふざける(1)ルールの無視(1)	24
	迷惑な絡み	振り回される(2)いじられる(2)	
	非道徳的な振る舞い	いじめ(3)陰口(4)見下した態度(6)	
不自由感	言動の不自由	自分らしさの抑制(3)/発言の抑制(3)決定権の剥奪(3)交友関係の不自由(1)	19
	萎縮	気遣い(5)緊張(3)恐怖(1)	
間接的被害	他者への同情	下位への同情(3)/友人への同情(1)	7
	板挟み	友人への悪口を聞く(2)グループの仲介役(1)	

表2 スクールカースト内の居心地が「良い」と感じていた理由

カテゴリー	内容	数
無害感	困ることがなかった(3)/グループ間の不干渉(3)/カーストが軽かった(2)/衝突がなかった(1)/上位と関わらなかつた(1)/気にならなかつた(1)	11
良好な交友関係	皆の仲が良かった(5)/友達がいた(3)/団結力があつた(1)/雰囲気良かった(1)	10
地位の高さ	上位と仲が良かったから(2)/下位ではないから(2)/中間にいたから(2)	6
自由な振る舞い	目立っていたから(1)/発言権があつた(1)/積極的に行動していた(1)	3

表3 スクールカースト内の居心地が改善した体験の分類

大カテゴリー	カテゴリー	内容	数
交友の変化	交流範囲の変化	上位グループとの交流(5)/交流の拡大(4)気の合う友人(2)	28
	交友スタイルの変更	穏便に済ます(3)/素の自分を出す(2)/マイペースに過ごす(2)立ち向かう(1)自虐する(1)	
	目標の共有	活躍する(3)/協力する(5)	
意識の変化	とらわれからの解放	関心の喪失(2)/受容(1)/視野の広が(1)自信の獲得(1)	7
	苦手意識の解消	憎めなくなる(1)/恐怖が薄れる(1)	
環境の変化	時間的变化	クラス替え(2)進学(2)成長(1)	7
	教師の関与	注意される(1)/影響を受ける(1)	

4. 考察

(1) スクールカースト内の居心地が「悪い」と感じられていた理由

① 上位グループの言動

威張ったり騒いだりといった「見苦しい態度」、上位という立場からの高圧的な「迷惑な絡み」、いじめや陰口といった「非道徳的な振る舞い」などの上位グループの言動が不快感を呼び、異なる地位の生徒の居心地の悪さに繋がっていた。

② 不自由感

クラス内でそれぞれの地位によって暗黙のうちに言動が抑制されており、居心地の悪さに繋がっていた。また、スクールカーストによって不安感が高まるという指摘通り（小原・平山，2018；作田，2016）、主に自分よりも上位のグループと接する際に緊張や気遣いが生まれ「萎縮」に繋がっていた。

③間接的被害

スクールカーストによって辛い思いをしている「他者への同情」や、異なるグループの友人の間で「板挟み」状態になることを通じ、間接的にスクールカーストへの違和感が生まれていた。

(2)スクールカースト内における居心地が良いと感じていた理由

①無害感

スクールカーストが生じていても、それが「住み分け」程度の軽度なものであるときと、グループ同士が干渉である場合、自身への負の影響を感じず、居心地の悪さには繋がりにくいことが示された。

②良好な交友関係

良好な交友関係によって、スクールカースト内での居心地を好ましく感じていた状態を指す。スクールカーストがあっても、クラスの良い雰囲気や親しい友人の存在によって居心地が良くなる可能性が示唆された。

③地位の高さ

自身を主に「下位以外の地位」として認識することで、スクールカースト内の居心地を好ましく感じている状態を指す。自身が「どの地位に属しているか」という地位への意識そのものが居心地の良さを左右する可能性が考えられる。

④自由な振る舞い

スクールカースト内で周りの目を気にせず自由に振る舞うことで、居心地の良さを感じている状態を指す。スクールカーストの枠の中で萎縮するのではなく、思うままに行動することで居心地の悪さが緩和される可能性が考えられる。

(3)スクールカースト内の居心地が改善された体験

①交友の変化

これまで関りの少なかった友人とのかかわりが生まれる「交流範囲の変化」や、行事などの「目標の共有」を通じた協力、活躍、立ち向かうなどの意図的な「交友スタイルの変更」を行うことを通じ、交友のあり方がより自身の過ごしやすい方向に変化し、居心地の悪さが緩和されることが示された。

②意識の変化

スクールカーストへの関心を喪失するなどの「とらわれからの解放」や、苦手だった異なる地位の生徒の長所を見出すことなどを通じ「苦手意識の解消」を行うことで、スクールカーストへの意識が変化し、居心地の悪さが緩和することが示唆された。交友関係といった外的な変化が起こらなくとも、生徒本人のスクールカーストへの解釈次第では葛藤の解決に繋がりと考えられる。

③環境の変化

クラス替えによる上位グループとの別離や、クラスを受け持つ教師の交代などといった環境の変化を通じ、居心地の悪さが緩和されることが示唆された。教師がクラスに席替えなどの動的な変化を起こすことで、クラス内の階層構造を平等にする可能性 (Garandau, Lee, & Salmivalli, 2014) や、教師による関与がいじめ被害の抑制に効果的であることはこれまで指摘されてきているが (本間, 2007; 大西ら, 2009; 水野ら, 2017)、スクールカーストによる生徒の葛藤解決にも効果的である可能性が考えられる。

(4) スクールカーストにおける葛藤と葛藤が解決した体験との関連性

スクールカースト内にて生じていた葛藤とその葛藤が解決した体験との関連について整理し、図1に記す。

まず、上位グループの言動によって生じた葛藤は、交友の変化、意識の変化、環境の変化の3つそれぞれの体験が解決に繋がっていることが考えられる。次に、間接的被害によって生じた葛藤は、交友の変化、環境の変化の主に2つの体験によって解決に導かれることが推測できる。さらに、不自由感によって生じた葛藤は、主に交友の変化によって解決していることが考えられる。

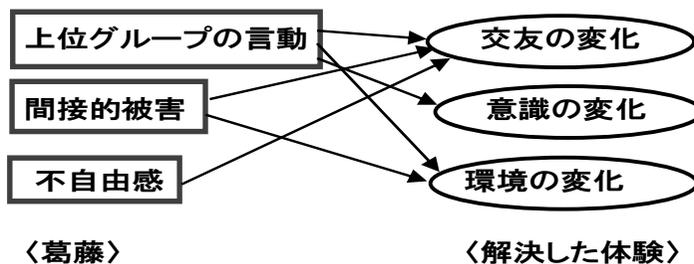


図1 スクールカーストにおける葛藤と葛藤が解決した体験との関連性

Ⅲ 第二研究

1. 目的

第1研究では、Googlefoamを用いた質問紙調査により、スクールカーストにおける葛藤とその葛藤が解決した体験の分類を行った。第二研究では、それらの葛藤がいかなるプロセスを経て解決に至るのかという点について検討することを目的とする。

2. 方法

(1)調査方法：40分～1時間程度の半構造化面接調査を行なった。質問項目を表4に示す。

表 4 質問項目一覧

1	体験したスクールカーストはどのようなものでしたか。
2	当時、スクールカーストの中の自分をどのように感じていましたか。
3	体験したスクールカーストにどのように対処していましたか。
4	スクールカーストの中で、居心地が変化した体験について、どのようなものか教えてください。
5	現在、当時のスクールカーストをめぐる自分の考え、行動を振り返り、どのように感じていますか。

(2)調査時期：2020年11月～12月

(3)調査協力者：中学校・高校におけるスクールカーストの中で感じていた葛藤が解決した体験をもつ大学生。第1研究で使用した質問紙の回答から、第2研究への協力の同意が得られた者の葛藤と、その葛藤が解決された体験について考慮し、調査協力者を決定した。本研究では13名(女性11名、男性2名)からの協力が得られた。平均年齢は22.2歳(SD=1.09)であった。調査協力者の情報については表5にまとめた。

表 5 調査協力者一覧

	分析対象者	年齢	性別	地位
1	a	22	女	中くらい
2	b	21	女	どちらかと言えば上の方
3	c	22	男	どちらかと言えば下の方
4	d	24	女	どちらかと言えば下の方
5	e	21	女	どちらかと言えば下の方
6	f	24	女	中くらい
7	g	21	女	中くらい
8	h	23	女	中くらい
9	i	23	女	中くらい
10	j	22	男	中くらい
11	k	21	女	中くらい
12	l	23	女	どちらかと言えば下の方
13	m	22	女	どちらかと言えば下の方

(4)分析方法：修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ(木下, 2007)を用いた。

分析テーマは「中学校・高校のスクールカーストにおける葛藤解決のプロセス」であり、分析焦点者は「スクールカースト内で感じられていた葛藤が変化した体験を持つ大学生・大学院生」とした。

3. 結果と考察

(1)ストーリーライン

分析の結果、36個の概念と12個のサブカテゴリ、7個のカテゴリが生成された。結果図を図5に示し、概念を【】、サブカテゴリを〈〉、カテゴリを《》で表す。また、プロセ

ス図を図2に示す。

まず、クラス成員が少人数の友人グループに分断されていることを認知する【グループの分断への認知】と、各グループの振る舞いや権力の違いから、スクールカースト上のそれぞれの地位を認知する【各地位の認知】により、〈クラス構造への認知〉が行われる。その後、〈クラス構造の認知〉により上位生徒だと認知した生徒による、他の地位の生徒の意見を無視するといった【強引に仕切られる】ことや、【悪口を聞く】【いじめを認知する】、上位生徒のみがクラス内で盛り上がっているように感じる【局所的な盛り上がり認知】を通じ、さらに〈クラス構造の認知〉を強めていく。このような《スクールカーストの認知》を繰り返すことで、《スクールカーストへの感情》が強められていく。

《スクールカーストへの感情》は、上位生徒から悪口を言われるなどスクールカーストによってつらい思いをしている【他者への同情】や、【自身に被害が及ぶことへの恐怖】を抱く〈間接的被害感〉、スクールカーストによって他のグループの生徒との交友のしづらさを感じている【交友の不自由感】、なぜ同じクラスメイトでありながらランク付けがあるのかと憤りを覚える【ランク付けへの違和感】、自らが上位生徒の作る雰囲気になじめていないと感じる【疎外感】の3つからなる〈スクールカーストへの不満〉、スクールカーストの枠の中で【人目を恐れる】、【上位生徒への恐怖】、【地位への劣等感】をもつ〈萎縮感〉の3つのサブカテゴリからなる。

《スクールカーストへの感情》を繰り返し感じる中で、自分なりに行動しようと考えた生徒は、理不尽な行動をする上位生徒に対し【言い返す】【問題提起】、自信の持てることをクラス内で発揮する【能力の発揮】からなる《主体的対応》を行う。また、部活動など【クラス外の居場所】や、【気の合う友人】、スクールカーストへの違和感を共有できる【カーストへの違和感を持つ友人】の存在は、生徒にとっての《気の休まる場》となる。さらに、《受身的な交流》は、【クラス単位の行事への取り組み】や【受験期への突入】【席が近くなる】といった〈異なるグループとの交流のきっかけ〉の元、共通の趣味の存在など【共通の話題】、ともに同じ目標を見据える【目標の共有】があれば〈方向性の一致〉へとつながっていく。また、〈方向性の一致〉がなされる結果、《主体的対応》が行われることもある。

《主体的対応》を通して、打ち解けていなかった他グループの生徒から受け入れられる【受け入れ】や、素直に自分の能力を評価される【能力への評価】が起これ、〈周囲の肯定的反応〉を受け取る。〈周囲の肯定的反応〉は繰り返され、【上位生徒との対等化】【カーストのやわらぎ】【交友範囲の広がり】からなる〈クラス構造の変化〉へとつながっていく。

《周囲の変化》《気の休まる場》《受身的な交流》は、《自己の変化》を引き起こす。まず、〈クラス構造の変化〉や、自らへの〈周囲の肯定的反応〉を受け、【上位生徒への恐怖の緩和】と、人目を必要以上に恐れる必要はないと感じる【周りを気にしすぎない】からなる〈気持ちの前向きな変化〉が起これると、〈しがらみから解放された行動〉が強められる。この〈しがらみから解放された行動〉は、過度な気遣いをせずに過ごすことのできる【のびのびする】や、【楽しく交流】を示すが、《気の休まる場》や異なるグループの生徒との〈方向性の一致〉、《周囲の変化》の影響も受けている。さらに、〈しがらみから解放された行動〉は〈気持ちの前向きな変化〉を強め、これらは相互に影響し合っ

いる。〈気持ちの前向きな変化〉と〈しがらみから解放された行動〉が影響し合う中、スクールカーストを気にして過ごすことに意味はないと考えられるようになる【スクールカーストへの執着の消失】、クラス内で楽しく過ごすことができるようになった自分への【自信の獲得】からなる〈自己の確立〉が行われ、さらに〈気持ちの前向きな変化〉と〈しがらみから解放された行動〉が強められていく。

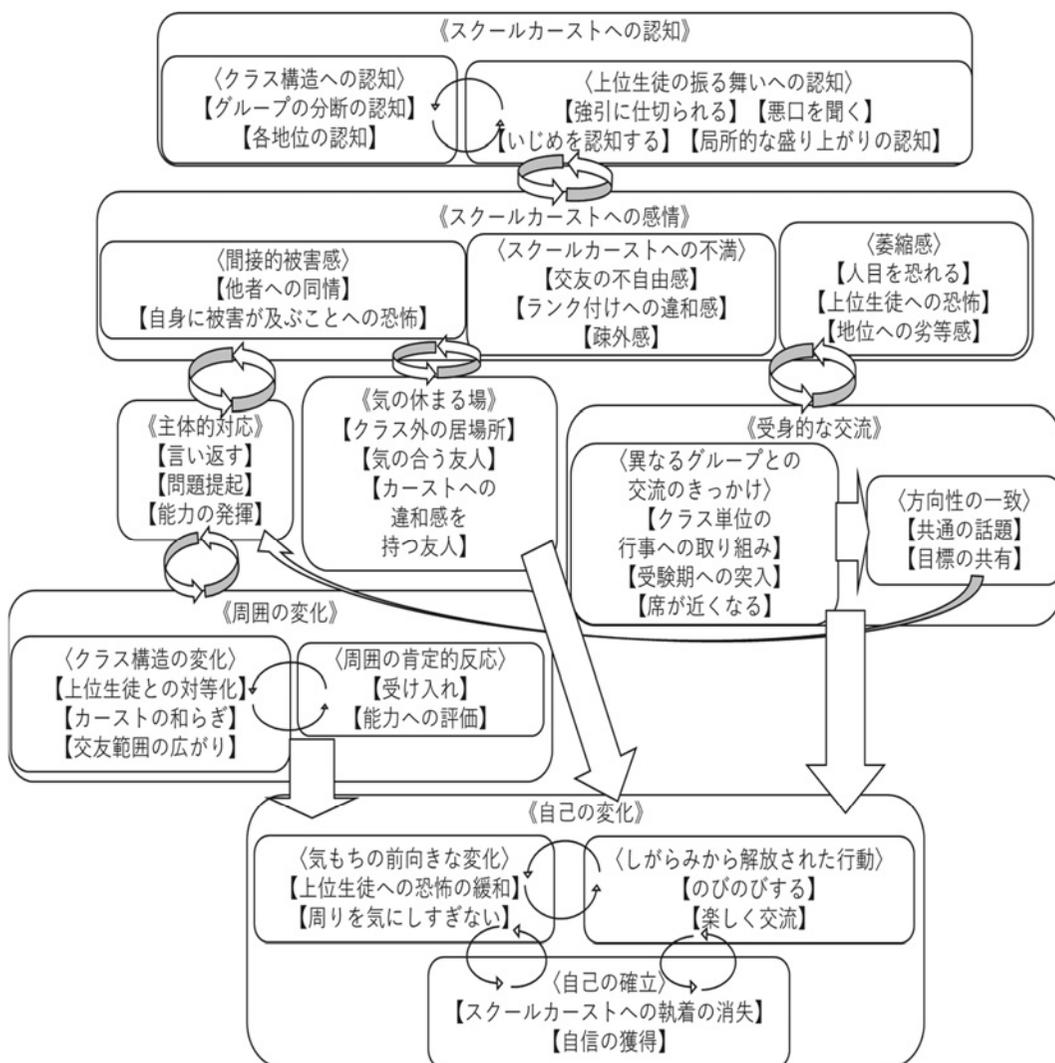


図2 中学校・高校のスクールカーストにおける葛藤解決のプロセス 結果図

IV 総合考察

(1) スクールカーストにおける葛藤解決のプロセス

スクールカーストにおける葛藤はこれまで、下位生徒が上位生徒に対して抱く恐怖心や窮屈さを中心に指摘されてきた(鈴木, 2012; 藤林・渡邊, 2019)。第一研究より、スクールカースト内で感じられる葛藤として「上位の言動」「不自由感」「間接的被害」の3つの大カテゴリが生成された。「上位の言動」「不自由感」は、それぞれ上位生徒の高圧的な言動へ絵の不快感や、クラス内での地位を踏まえた行動抑制を示すため、本研究の結果は先行研究を支持するものである。一方、「間接的被害」は、スクールカーストによって辛い思いをする友人や下位の生徒への同情心や、異なるグループの友人の間で板挟みとなることへの苦しみを表すが、先行研究ではこのような葛藤についてはほとんど示されてこなかった。直接的に上位グループの生徒から高圧的な振る舞いを受けたり、自らの抑制や恐怖心からの萎縮をしたりはしなくとも、間接的にスクールカーストへの違和感が生まれ得ることを示した点において、本研究は意義があるといえる。

第二研究では、第一研究にて明らかにしたスクールカーストにおける「葛藤」が解決に至るまでのプロセスを導き出した。スクールカーストへの対処という視点においては、教師の関与がクラス内の階層構造を平等にする可能性がある(Garandau, Lee, & Salmivalli, 2014)ことや、所属集団内外に居場所があることが学校での過ごしやすさに繋がること(藤林・渡邊, 2019; 小原・川崎, 2019)などが指摘されてきたが、その具体的なプロセスについてはこれまでほとんど検討されてこなかった。よって、スクールカーストへの葛藤が生じてから、その葛藤がどのように緩和され、生徒の中で解決されていくのかというプロセスを明らかにできたことが、本研究の成果の1つである。

まず、スクールカーストの葛藤解決には、生徒自身が不満を抑圧せずに表現したり、上位生徒の目を気にせず能力を発揮したりする《主体的対応》が効果を持つ。スクールカーストにおいて、地位にそぐわない行動をすることは上位生徒から目を付けられ、さらに地位を下げるリスクがあるとされているが(鈴木, 2012)、その《主体的対応》に対する〈周囲の肯定的反応〉が得られると、上位生徒との対等化や、カーストの和らぎといった〈クラス構造の変化〉が生じる。さらに、藤林・渡邊(2019)が所属集団内外に居場所があることが学校での過ごしやすさに繋がることを指摘しているように、集団内外の居場所はスクールカーストに葛藤を感じる生徒の《気の休まる場》となる。

また、行事や受験を通じて話題や目標を共有できると、異なるグループの生徒との交流が生まれる。このような周囲の変化や、気の休まる居場所の存在、異なるグループの生徒との交流は、〈気持ちの前向きな変化〉〈しがらみから解放された行動〉に繋がる。気持ちと行動の前向きな変化は、相互に影響を及ぼし合いながら最終的にはスクールカーストへの執着の消失や、自信を獲得するといった〈自己の確立〉を促していく。

以上より、スクールカーストに対する主体的な対応への周囲の肯定的反応や、気の休まる居場所、異なるグループとの新たな交流を通じ、気持ちや行動が前向きに変化し、スクールカーストに揺さぶられることのない確固たる自己が確立すると、スクールカーストにおける葛藤は解決に向かうと考えられる。

(2) 葛藤解決を通じた自己の成長について

中学校・高校のスクールカーストにおける葛藤は、《自己の変化》へと帰着することで解決の方向へ向かうことが示された。第一研究では、スクールカーストへの関心を喪失したり、クラス外の広い世界に視野を向けたりといった「意識の変化」によってスクールカースト内の居心地が改善するという結果が得られていたが、これは第二研究のプロセスにおける《自己の変化》を構成する〈自己の確立〉というサブカテゴリに該当すると考えられる。〈自己の確立〉へは、スクールカーストに主体的に対応した結果、周囲から肯定的に受け入れられたり、集団内外に気の休まる場を見つけたり、異なるグループの生徒と仲を深めたりといった出来事を通じ、上位生徒への恐怖の緩和などの気持ちの前向きな変化や、人目を過度に気にせずにのびのびとした交流ができるようになることで到達する。この〈自己の確立〉は、スクールカーストを気にしながら生活することに意味はないと考えたり、自信を獲得したりといった、スクールカーストにゆさぶられることのない確固たる自己を確立したことを表している。よって、スクールカーストへの対処や交流の変化を繰り返すことで、気持ちや行動が前向きに変化すると、スクールカーストに対する考え方や自身に対する意識も変化し、今後同じような困難が訪れても対処していけるような自己を確立できるようになると考えられる。青年期に当たる中学校・高校はアイデンティティを形成する重要な段階であるといえるが、スクールカーストに関する葛藤に適切に対処し、自身の中で解決していくことで、自己に対する肯定的な意識が形成されていくという結果は、スクールカーストの肯定的な面を見出すことにも繋がると思われる。

(3) 臨床への示唆

本研究の結果より、主体的対応の結果、周囲から肯定的に受け入れられると、葛藤の解決に向かうことが明らかとなった。また、異なる地位のグループの生徒と共通の話題を持つことは、より多くの生徒とののびのびとした交流に繋がっていた。このことから、スクールカーストに葛藤を抱く生徒自身が実施可能な積極的な対処として、自分の意見を主張することや、自身の能力を発揮するよう行動するといった、主体的な対応を行うことが重要である。また、その対応を支持する周囲の肯定的な反応が必要であるといえる、さらに、より多くの生徒と交流を図れるような共通の話題を持つことが有効であると考えられる。

一方、教師が注意を行うことや、生徒同士の交流を深められるような行事を実施することで、クラスの構造を変化させる可能性がある。また、家族やスクールカウンセラーといったクラス外の存在が、生徒にとっての気の休まる場となることで、生徒のスクールカーストへの執着を消失させることも示された。教師や家族といった第三者による生徒への適切な関与が、生徒の葛藤を緩和に導いていくと考えられる。

【引用文献】

Garandeau, F. C., Lee, I. A., & Salmivalli, C. (2014). Inequality Matters: Classroom Status Hierarchy and Adolescents' Bullying. *Journal of Youth and Adolescence*, (2013), 43, 1123-1133. Doi:10.1007/s10964-013-0040-4.

本間友己 (2003) 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応. 教

- 育心理学研究, 51, 390-400.
- 水野君平(2016)学校適応感とその予測要因に関する検討(1)―「学校適応」の負の側面としてのスクールカースト―. 北海道大学大学院教育学研究紀要, 126, 101-109.
- 水野君平・加藤弘通・太田正義(2017)小学生のスクールカースト、グループの所属、教師との接触といじめ被害の関連, 心理科学 38, (1) 63-73.
- 森口朗(2007)いじめの構造. 新潮新書
- ーブを巡って―. 人間の発達と研究: 明治学院大学教職課程論叢, 10, 97-117.
- 小原一馬・平山愛理(2018)大学生における, 中高時のスクールカースト経験の長期的影響. 宇都宮大学教育学部研究紀要, 68, 105-12.
- 小原一馬・川崎詩織(2019)大学の居場所の意義―スクールカーストの悪影響の解決. 宇都宮大学教育学部研究紀要, 69, 73-83.
- 木下康仁(2007)ライブ講義M-GTA実践的質的研究法修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂
- 貴島侑哉・中村俊哉・笹山郁生(2017)スクールカースト特性尺度の作成と学級内地位との関連の検討. 福岡教育大学紀要. 66, 4, 27-37.
- 岸俊行(2014)教室での関係性を考慮に入れたいじめ問題の検討―いじめ問題と傍観者及びスクールカーストとの関連. 強心第56回総会, 563.
- 大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和(2009)児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響. 教育心理学研究, 57, 324-335.
- 作田誠一郎(2016)「スクールカースト」における中学生の対人関係といじめ現象. 佛大社会学, 40, 43-45.
- 鈴木翔(2012)教室内カースト. 光文社